

## 戦後東北におけるたばこ作経営の展開

著者	高橋 寛次
雑誌名	農業経済研究報告
巻	11
ページ	161-183
発行年	1970-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/33281">http://hdl.handle.net/10097/33281</a>

# 戦後東北におけるたばこ作経営の展開

高 橋 寛 次

## 目 次

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| I はじめに           | (2) 経営組織       |
| II 東北におけるたばこ作の展開 | (3) 生産の担当層     |
| 1. たばこ作の変遷       | 2. たばこ作農家の分化   |
| 2. たばこ作の地域性      | (1) たばこ耕作規模    |
| 3. たばこ作の地帯分布     | (2) 専門的経営の可能性  |
| 4. たばこ作の収益性      | IV たばこ作の技術的發展  |
| III たばこ生産農家の分化   | V たばこ作発展のための方策 |
| 1. たばこ生産農家       | VI むすび         |
| (1) 専業の状態        |                |

## I は じ め に

農業生産のなかで、葉たばこ（以下たばことして叙述）は制度の面からはもちろん、生産の面においても特殊な商品作物であることはいうまでもない。しかしながら、農家が農業経営のなかにたばこ作を導入した場合、一般農政下におかれる作目生産と、無関係に存在するわけにはいかない。つまり、たばこは、農業経営のなかで補合、補完的な作物としてとりいれられており、そしてたばこ作は、他作目の動向によって影響され、他作目の動向に影響をおよぼすという関係にあるからである。さらにまた、たばこ作の収入は、農家の経済に重要な地位を占めている。

このような意味をもつたばこ作は、それぞれの地域、さまざまな経営形態のなかに広汎に導入されてきた。製造たばこ消費需要の増大にともなう専売公社の増反策ともあいまって、農

農業基本法農政以降、農業構造改善事業の基幹作目にたばこをとりあげる町村もあって、\* たばこ作は急速な発展を遂げた。とくに、大都市より遠隔地にあたる東日本、東北においては、たばこ作の顕著な発展をみることができる。

ここでは、戦後東北におけるたばこ作経営の展開をたどり、今後の発展策などについてみてみたい。

## Ⅱ 東北におけるたばこ作の展開

### 1 たばこ作の変遷

戦後、東北におけるたばこ作は、ほぼつぎの5期に分けることができる（これは、全国的な傾向でもある）。すなわち、第1期は昭和20～26年で、戦前への回復期にあたる。第2期は、昭和27～32年であり、公社の増反政策もあって急速に発展する時期である。第3期は、昭和33～36年迄の衰退期である。この時期は、葉たばこの過剰在庫をかかえ、かってない面積縮減策がとられたことや他産業の発展にともなって、農家労働力の流出がすすみ、労働集約的なたばこ作が敬遠されたためである。そして第4期は、昭和37～41年である。たばこ作が、史上かつてない急速な発展を遂げている。これは、減反化に苦慮した公社が、積極的な増反策にでた結果である。増反策の第1は、価格の引上げであり、第2は、後章で詳しくのべるが、栽培技術の改善（品種の更新を含む）や

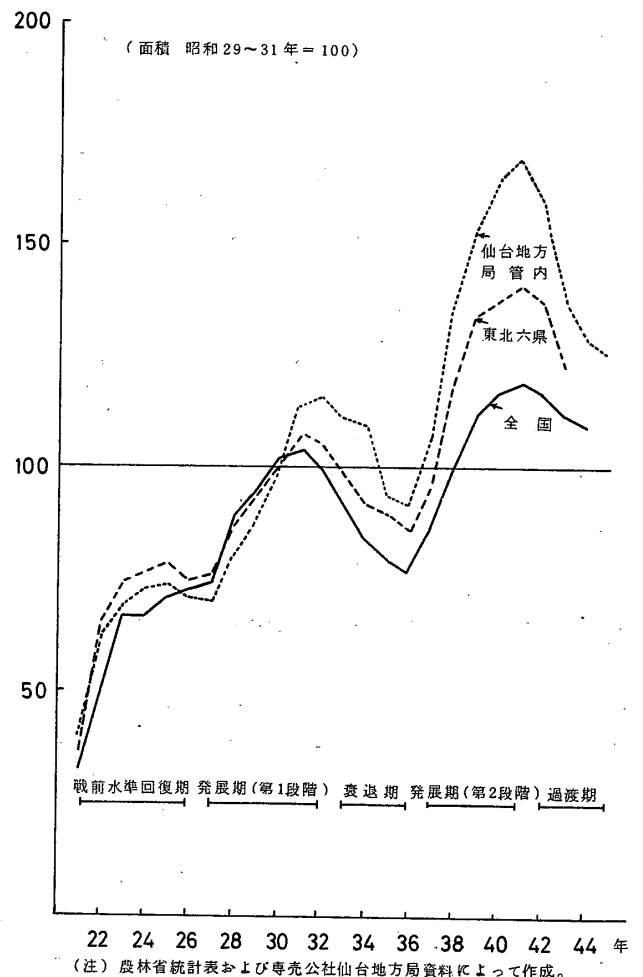


図1 たばこ作付の変遷

\* (「昭和43年度東北農業状勢報告」東北農政局) によって、昭和37年より同43年度までの経済地帯別、基幹作目別地域数をみると、なばこを基幹作目にとりあげているところが22地域（平地農村5，農山村7，山村10）となっている。

葉のし作業の廃止による省力耕作の推進であった。第5期は昭和41年以降であり、衰退化の傾向をしめし過渡期となっている。稲作や兼業にくらべて、零細なたばこ作ではうまい味がなくなったこと。加えて、公社の減反政策（昭和44年産6.7%）がとられるにいたっていることなどによる。たばこ作にとって、新たな画期となっている（図1）。

こうしたたばこ作の変遷のなかで、東北のたばこ作の全国に占める地位は、どう変わってきているであろうか。これを農区別に、たばこ作面積によってみよう。昭和21年における東北は、全作付面積の22.4%を占め、関東・東山に次いでいた。昭和43年には19.9%になり、関東・東山を凌駕し九州の23.5%に次ぐ

表1 農区別たばこ作付面積

単位：ha. %

項目 農区	21年	43年	増加数 (43-21)	増 加 寄与率	構 成 比	
					21	43
北海道	109	—	△109	△0.5	0.5	—
東北	5,259	16,338	11,079	47.2	22.4	19.9
北 陸	612	5,172	4,560	19.4	2.6	6.3
関東・東山	6,600	14,460	7,860	33.5	28.1	17.6
東 海	435	2,468	2,033	8.7	1.9	3.0
近 畿	1,013	1,570	557	2.4	4.3	1.9
中 国	2,142	12,140	9,998	42.6	9.1	14.8
四 国	2,540	10,660	8,120	34.6	10.8	13.0
九 州	4,781	19,288	14,507	61.8	20.4	23.5
全 国	23,490	82,096	58,606	249.5	100	100

にいたった。さらに、東北のたばこ作を作付増加寄与率で見ると、九州には劣るが47%をしめし、関東・東山よりかなり高い。このように、東北におけるたばこ作の地位は、九州に次いで急速に高くなっていることがわかる（表1）。昭和44年における主産県は

（農林省農林水産統計月報

注）農林省統計表によって作成。

1970.5）茨城、鹿児島、取島、岡山、香川、栃木、新潟などであって、東北においては、福島、岩手が主産県となっている。

さらに、東北各県（以下の叙述は、ことわりない限り専売公社仙台地方局管内、したがって、福島県は除かれる）のたばこ作の変遷をみよう。戦後の最大面積を県別にみると、岩手は4.9千haで、東北における総作付面の約半数弱を占めている。山形1.4千ha、青森1.7千ha、以下宮城、秋田の順となり、全体では1万ha強となっている。衰退期の底をなす36年と発展期の頂点をなす41年を比較すると約4.7千ha増大したことになる。増加率の高い県は秋田の16.3%、以下青森、宮城などでいずれの県も増大している。さらに、発展期の41年と停滞もしくは衰退傾向をしめす45年を比較すると、約2.6千ha減少し、秋田は36%の減少率で前期とは逆に最も高い。以下青森、岩手、山形などの順に減少している（表2）。

このようなたばこ作の盛衰現象は、公社の生産政策と強く関連する問題であるが、昭和30年以降における開田や兼業の影響もまた大きかったのである。

表 2 たばこ作の変遷

単位：ha. %

年 度	21	27	32	36	41	45	増 減				増 減 率			
							32-27	36-32	41-36	45-41	32/27	36/32	41/36	45/41
青 森	165	347	670	674	1,720	1,164	323	4	1,046	△ 556	93.1	0.6	155.2	△32.3
岩 手	1,946	2,172	3,531	2,965	4,900	3,454	1,359	△ 566	1,935	△1,446	62.6	△16.0	65.3	△29.5
宮 城	169	625	882	585	1,250	1,201	257	△ 297	665	△ 50	41.1	△33.7	113.7	△ 4.0
秋 田	182	417	773	426	1,120	719	356	△ 347	694	△ 401	85.4	△44.9	162.9	△35.8
山 形	326	813	1,322	1,021	1,430	1,302	509	△ 301	409	△ 128	62.6	△22.8	40.1	△ 9.0
仙台地方局合計	2,788	4,374	7,178	5,671	10,420	7,840	2,804	△1507	4,749	△2580	64.1	△21.0	83.7	△24.8

(注)1.農林省統計表 45 年は専売公社仙台地方局資によって作成。

2.△印はマイナスをしめす。

## 2 たばこ作の地域性

昭和43年、全農家に対するたばこ作農家の割合を、県別にみると、岩手の18%を最高にして、青森、宮城、秋田と続き、山形は5.4%で最も低い。これを農業地域別にみると、岩手では北上川下流の21%をはじめ、東南部、北部などが全体として高い割合を占めている。青森は三八の17%、上北・下北のいわば畑作地域において高く、水田、りんご作がさかんな東青や津軽地域は、たばこ作農家が極めて少ない。宮城では、南部の10.2%をはじめ、東部、北部、中部の順になっている。秋田は、いずれの農業地域でも、5.5%前後のたばこ作農家率となっていて、地域的な差異はほとんどみられない。山形は、村山や最北が6.5%前後、水稻単作の代表をなす庄内地域は、わずかに2%にすぎない。

このようにみると、たばこ作農家比率の高い地域は、岩手の北上川下流を除けば、畑地率が30～55%を占める地域、すなわち、田畑作地帯ならびに畑を加味する田作地帯において顕著であることがわかる。青森の上北・下北、三八、岩手の北上川上流、東南部、山形の村山、宮城南部などの、いわゆる田畑作地帯では、東北におけるたばこ総作付面積の約40%弱を占めている。

また、たばこ作農家の、畑面積に対するたばこ作面積比率の高い地域は、宮城の東部、中部、北部、秋田の雄物川、山形の置賜、村山、岩手の北上川下流など水田率の高い地域にみられる。水田作地帯における畑地に、たばこがかなり入りこんでいることをしめしている。さらに、1農家当たりのたばこ作付面積をみると、村山が最も高く29a、以下置賜、宮城南部、三八、北上川上流、最北などで、最も少ないのは東青地域の13a、東北五県の平均は20aとなっている。置賜や最北のように、水田率の高いところを除けば、畑地率の高い田畑作地域が、1農家当たりのたばこ面積も相対的に大なのである(表3)。

表3 農業地域別たばこ作農家概況

昭和43年10月31日現在

項 目 農業地域別	全 農 家	たばこ 作 農 家	耕 地 面 積	たばこ作 農 家 畑 地 面 積	たばこ作 付 検 査 面 積	比 率			たばこ作農家 1戸当たりたば こ作付面積		作 付 品 種
						たばこ 作農家	畑 地	たばこ作付 農家の畑面 積に対する たばこ作付 面積	43年	40年	
青 森	戸 50,816	戸 5,399	ha 80,845	ha 5,933	ha 1,125.4	% 10.6	% 50.3	% 19.0	21 <sup>a</sup>	19 <sup>a</sup>	パーレー
東 青	9,155	93	9,876	42	12.3	1.6	26.0	29.3	13	11	
津 軽	4,100	131	5,926	125	24.3	3.2	19.3	19.4	19	15	
上北・下北	19,872	2,118	43,618	2,560	396.8	10.7	54.9	15.5	19	17	
三 八	17,689	3,057	21,425	3,206	692.0	17.3	60.8	21.6	23	21	
岩 手	113,826	20,686	125,440	12,964	3,904.5	18.2	40.4	30.1	19	17	パーレー 2在, 4在 5在
北上川上流	22,846	2,939	30,175	2,364	630.6	12.9	44.6	26.7	21	18	
北上川下流	54,983	11,530	59,719	5,140	2,162.0	21.0	23.5	42.1	19	17	
東南部	12,976	2,560	9,941	1,348	419.9	19.7	45.5	31.1	16	15	
下閉伊部	8,306	951	9,184	1,225	150.3	11.4	76.6	12.3	16	13	
北 部	14,715	2,707	16,420	2,887	541.7	18.4	70.6	18.8	20	17	
宮 城	102,477	6,704	138,141	2,528	1,230.4	6.5	24.4	48.7	18	14	5在
南部	18,221	1,857	25,649	1,004	458.8	10.2	47.0	45.7	25	17	
中部	19,146	1,027	26,458	310	162.5	5.4	21.5	52.4	16	12	
北東部	42,543	2,419	61,621	773	368.8	5.7	16.3	47.7	15	17	
東 部	22,567	1,401	24,413	441	240.3	6.2	24.3	54.5	17	14	
秋 田	87,524	4,959	110,784	2,387	867.8	5.7	19.4	36.4	17	14	パーレー 2在, 4在
米代川	16,189	1,016	20,020	692	160.9	6.3	31.5	23.3	16	14	
日本海沿岸	16,634	903	20,652	630	186.7	5.4	21.4	29.6	21	14	
由利川	8,186	418	11,312	116	51.1	5.1	19.0	44.1	12	12	
雄物川	46,515	2,622	58,800	949	469.1	5.6	14.8	49.4	18	15	
山 形	94,410	5,091	105,123	2,957	1,327.0	5.4	26.5	44.9	26	21	2在 パーレー 5在
庄内	10,694	203	18,107	160	29.6	1.9	10.7	18.5	14	12	
最北山	16,229	1,021	21,317	506	211.0	6.3	22.0	41.7	21	17	
村 置	41,497	2,735	39,287	1,678	781.2	6.6	41.5	46.6	29	23	
置 賜	25,990	1,132	26,412	613	305.2	4.4	18.8	49.8	27	22	
五 県 計	449,053	42,839	560,333	26,769	8,456.1	9.5	31.1	31.6	20	18	

(注) 1. 専売公社仙台地方局資料によって作成した。

2. 全農家とは、たばこ耕作市町村の農家をしめす。したがって総農家数は一致しない。

つぎに、栽培品種をみよう。品種は、パーレー種と第2在来種が主体をなし、全作付面積の84%を占めている。青森は全面積パーレー種、秋田はパーレー種が主体で第2、第4在来種、岩手はパーレー種と第2在来種が相半ばして主体をなし、第4在来種、第5在来種がわずかに入っている。宮城は、第5在来種オンリーである。山形は、ほとんどが第2在来種である。したがって、東北のたばこ作を栽培する品種によって、青森、岩手、秋田はパーレー種の産地、岩手、山形は第2在来種、宮城は第5在来種の

産地として大別することができる。これらは、それぞれの地域に適品種として栽培されているものである。たとえば、パーレー種は相対的に栽培が容易で、東北の北部地域で、とくに収穫期に温度較差のあるところが、概して良質葉が生産されるといわれている。また、第2在来種は、長いタバコ作の歴史のなかで、山形、岩手などに支配的に栽培されてきている。かかる意味合からすれば、品種によっても地域の特性をみることができる。しかしながら、第2、第5在来種は、いずれの地域にも栽培されうる品種であって、特定産地に固定的な品種であるわけではない。したがって、専売公社の生産政策が、タバコ栽培の地域性を規定する面が強いのである。

### 3 タバコ作の地帯分布

タバコ作が、田畑作地帯と田作地帯に大別され、広汎に存在していることをみてきた。ここでは、タバコ作がいかなる経済地帯に分布しているかをみよう。いずれの県をとっても、農山村におけるタバコ作が圧倒的な比率（耕作戸数と耕作面積はほぼ同率）を占めている。農山村で占めるタバコ作をみると（1965年、タバコ作農家センサス）、青森40%、岩手80%、宮城60%、秋田90%、山形75%前後となっている。これを、衰退期の35年と発展期の40年を比較すると、青森や秋田では、平地農村の比重が減って、農山村が増加している。山形は、平地農村が増大し、農山村が減少している。岩手、宮城も、山形と同様な傾向をしめしている。さらに、岩手、宮城について43年までの動きをみると、岩手では耕作戸数、面積ともに農山村が圧倒的であることに変わりはないが、農山村におけるタバコ作の比重は、一貫して低下している。岩手県における近年のタバコ作の立地は、次第に平地農村に移動していることがわかる。宮城県の場合

表4 経済地帯別タバコ作農家戸数と面積

単位：%

項目 県年次別	戸 数					面 積				
	都市 近郊	平地農村	農山村	山村	合 計	都市 近郊	平地農村	農山村	山村	合 計
岩手	0.3	35	14.7	85.3	100.0	0.2	35	11.3	88.7	100.0
		40	21.6	78.4	100.0		40	18.7	81.3	100.0
		43	28.5	61.9   9.2	100.0		43	24.4	66.3   8.1	100.0
宮城	0.5	35	38.4	61.6	100.0	0.5	35	40.8	59.2	100.0
		40	59.7	40.3	100.0		40	54.6	45.4	100.0
		43	42.0	55.0   2.4	100.0		43	36.8	60.7   2.0	100.0

注）昭和35、40年は、専売公社「タバコ作農家センサス」43年は専売公社仙台地方局資料によって作成。

合は、40年やや平地農村に移動したが、43年には63%と、岩手とは対照的に、農山村での比重が高まっている。この理由をあきらかにすることは困難であるが、一つは、タバコ作農家の、畑面積に対するタバコ作面積比率に関係しているようである。また、農山村において、

有力な畑作商品作物が少ないことも関係しているとおもわれる。こうして、宮城の場合は、都市近接地より遠隔地へと、外延的に拡大されているのである。一方、岩手は、北上川下流地域でのたばこ作が、稲作経営を補合、補完するかたちで発展したこと。労働市場の遠隔地にある農山村、山村における出稼ぎが一層増大していることなどが、その理由になっているとおもわれる。いずれであっても、両県におけるたばこ作は、面積で61~65%が農山村においてすすめられ、都市近郊においては、ほとんどみられない(表4)。

#### 4 たばこ作の収益性

たばこ作の立地移動は、東北全体でみれば、必ずしも一様の動きをしめしているわけではない。しかし、少なくともほぼ二つの流れをもっていることがわかった。こうしたなかで、農山村のたばこ作は、依然として経済地帯の主座にたっているのである。

ここでは、経済地帯別にみた場合、たばこ作の収益性にいかなる相違があるかを、岩手を例にして検討しよう。まず、1戸当たりのたばこ作規模をみると16~20aであって、経済地帯間における差異はない。生産力(反収)では、山村の296kgが地帯間で最も高く、ついで農山村、平地農村の順に低くなっている。品質をみると、生産力とは全く逆の関係をしめしている。これは、山村のたばこ作が、平地農村のたばこ作にくらべて、一つには相対的に多肥、多収型のものが多く、栽培条件が充分でないためとおもわれる。かくて、経済地帯間における生産力の差異は、その儘経済地帯間の粗収入の多少となって現われてこない。ここで、経営の客観的な生産能率をはかる指標として、10a当たりの純収益をとってみると、平地農村は5.2千円、農山村マイナス7.8千円(在来種、パーレー種平均)山村では、マイナス8.8千円となっている。純収益の多少は、家族労働報酬に直接反映され、平地農村の家族労働報酬は最も高く、農山村、山村のそれとの間に約1万円の差となって現われる。平地農村におけるたばこ作の、相対的有利性を明瞭にしめしている。さきに、岩手県におけるたばこ作が、農山村から平地農村へ立地が移動している理由として二つほどあげた。すなわち、たばこ作が稲作を補合、補完するかたちをとっていること。あるいは、農山村、山村の出稼ぎが一層増大していることなど。しかし、たばこ作の立地移動は、収益性の観点からもとらえることができる。

つぎに、経済地帯別に、たばこ他作目間の相対的優位性を検討してみよう。優劣を判定する指標としては不充分であるが、ここでも、純収益、家族労働報酬、ならびに1日当たりの家族労働報酬をとることとする。まず、平地農村におけるたばこの純収益をみると、米、養蚕について5千円前後となっている。農山村、山村では乳用牛を上回るだけで、他作目に劣り、7~9千円のマイナス純収益となっている。また、家族農業経営においては、農業所得の最大が農業経営の目標におかれるから、家族労働報酬が重視される。これによれば、いずれの経済地帯においても、



表 5 作 目 別 生 産 費 と 収 益 性

(岩手県経済地帯別抽出 昭和43年8月20日調)

経済地帯	作目	栽培農家戸数	栽培農家1戸当り現面積	平年度10アール当り収益・費用見込										純収益	家族労働報酬日数	1日当り家族労働報酬	たばこ作収益との相対比較	たばこ作に対する競合度合																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
				収量	単価	生産費					計	家族労働費以外の生産費																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
						粗収入	固定費	変動費	計																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
										円			円						円	円																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
(平地上農下流村)	たばこ	1419	16 <sup>a</sup>	kg	円	円	円	円	円	円	円	円	日	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円

(注) 1. 専売公社仙台地方局資料によって経済地帯別に組替え作成した。  
2. 平地農村(北上下流)は仙台地方局一関出張所管内, 農山村(北上上流)は平厩出張所管内, 山村(下閉伊)は宮古出張所管内である。  
3. 生産費は, 第1次生産費をとっている。  
4. たばこ作収益との相対比較はそれぞれの地帯における関係機関の係員協議によるもので, 粗収入, 投下資本, 栽培期間, 収益, 産地労働市場などを総合的に判断したもの。  
5. △印はマイナスをしめす。  
6. 参考に掲げたのは福島県のたばこ作, 農林省統計調査部(「野菜・果樹・工業作物等の生産費」各年)によって作成した。

たばこを上回る作目はない。したがって、たばこが最も労働集約に適した作目といえる。さらにまた、農家経済の目標は、農家所得の最大にあるから、労働効率の指標を重視しなければならない。とくに、他産業への就業機会が多くなっている今日では、一層重要な指標となる。これによれば、平地農村は水稻作の労働効率が最も高く、ついで養蚕、乳用牛、たばこ、小麦の順になっている。農山村では水稻、養鶏、養蚕、役肉牛、大麦、小麦、たばことなっている。たばこ作の労働効率を下回る作目としては、りんご、乳用牛のみである。山村では、水稻、たばこ、乳用牛、養蚕の順に労働効率は低下している（表5）。

このようにみると、たばこは最も労働集約的で、家族労働報酬は、他のいずれの作目よりも高い。たばこ圃地にめぐまれ、家族労働の完全燃焼をはかる農家にとっては、極めて有利な作目である。しかしながら、労働効率の面からみると、農家にとって必ずしも有利な作目とはいえない。とくに、今日のように、兼業化が増大している事情のもとでは、兼業によって、たばこ作が駆逐されかねないのである。

ちなみに、兼業労賃を通勤産業および農村内農外諸賃金についてみよう。通勤産業の賃金は、中小工鉱業地帯が最も高く、その他の地帯においては、賃金格差は必ずしも明瞭でない。強いていえば、農山漁村の賃金が相対的に高く、米麦作地帯、複合経営地帯の順になっている。農村内農外諸賃金についても、ほぼ同様のことがいえる。また、通勤産業の賃金は、1日当り0.8~1.3千円となっている。男子は、女子の賃金を200~300円程度上回っている。したがって、男子の通勤産業の諸賃金は、たばこ作1日当たりの労働報酬を300円前後上回り、女子はほぼ匹敵する賃金となっている。また、農村内農外諸賃金をみると、造林、伐出、木材運搬などの、山林

表6 通勤産業および農村内農外諸賃金

項目 地帯・県別		通勤産業				農村内農外諸賃金			
		恒常的賃労働		臨時日雇					
		男	女	男	女	造林	伐出	木材運搬	土木
岩手	中小工鉱業地帯	1,300	975	1,141	825	1,233	1,764	1,683	1,262
	複合経営地帯	1,147	845	1,139	788	1,104	1,589	1,628	1,213
	米麦作地帯	1,188	861	1,070	796	1,145	1,730	1,970	1,193
	農山漁村地帯	1,190	829	1,141	797	1,105	1,621	1,684	1,200
	計	1,219	860	1,141	802	1,132	1,651	1,684	1,214
参考	青森	1,215	894	1,228	906	1,297	1,703	1,710	1,335
	宮城	1,142	965	1,061	793	1,191	1,532	1,708	1,157
	秋田	1,173	866	1,074	784	1,192	1,531	1,601	1,211
	山形	1,093	841	976	767	1,211	1,346	1,706	1,290

注) 全国農業会議所（「農業臨時雇賃金調査結果」昭和43年度）によって作成。

関係の賃金は、約1～1.5千円となっている。

たばこ作労働報酬と兼業労賃を単純に比較することはできないが、便宜的にこれによって比較すると、兼業労賃はたばこ作労働報酬より、かなり有利な賃金となっている。また、35～36年頃より、農業労賃がとくに高騰を続け、38年には他産業労賃に匹敵するようになった。農業における雇用が一層困難になっていることをしめしている。このことは、単にたばこ作に雇用を入れることが困難であるばかりでなく、たばこ作の1日当たりの労働報酬を雇用賃金の支払いが上回り、たばこ作のうま味が減殺される結果になっている(表6, 7)。

表7 農業および農外労働賃金

(岩手県男子1日当り)

年 度	農業・他産業 労働賃金	他産業労働賃金	
		事 務	臨時日雇
	円	円	円
昭和35	325	367	363
36	404	468	477
37	501	547	564
38	645	647	626
39	623	600	589
40	770	781	776
41	871	851	838
42	940	936	975
43		1,219	1,141

注) 農業労働賃金は(「農林省統計表」各年)  
他産業労働賃金は、全国農業会議所(「農業臨時雇賃金調査結果」各年)によって作成。

### III たばこ生産農家の分化

#### 1 たばこ生産農家

##### (1) 専兼業の状態

兼業の増大は、たばこ作の経営にとって、大きな脅威になっていることをみた。ここでは、たばこ作農家の兼業化についてみよう。40年における(資料はやや古いが)たばこ作農家を品種別、専兼業別(旧分類)にわけると、第4在来種を除いては、いずれの品種でも、専兼相半ばしてい

表8 たばこ作農家の分類

単位：戸，%

項 目  品 種 別		たばこ作	新 分 類			旧 分 類		新分類比率		旧 分 類 比 率		
		農 家 数	第1種農家	第2種農家	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家	第1種農家	第2種農家	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家
		A)	B)	C)	D)	E)	F)	B)/A)	C)/A)	D)/A)	E)/A)	F)/A)
仙台地方局	パーレー種	25887	25799	88	11483	12521	1883	99.7	0.3	44.4	48.4	7.2
	第2在来種	20,191	20,114	77	10,498	8,583	1,110	99.6	0.4	52.0	42.5	5.5
	第4在来種	401	401	—	89	291	21	100.0	—	22.2	72.6	5.2
	第5在来種	8,351	8,342	9	4,215	3,524	612	99.9	0.1	50.5	42.2	7.3
	計	54,830	54,656	174	26,285	24,919	3,626	99.7	0.3	(48.0) 47.9	45.4	6.6
全 国		324,175	322,847	1,328	180,084	129,993	14,098	99.6	0.4	55.6	40.1	4.3

(注) 1. (「1965年たばこ作農家センサス」日本専売公社)によって作成。  
2. ( )内は、昭和43年現在、専売公社仙台地方局資料による。

る。兼業農家のたばこ作のうちわけでは、第1種兼業がほとんどである。40年以降も引続き兼業が進行していることから推定しても、依然半数以上のたばこ耕作者は、第1種兼業農家によって耕作されているとおもわれる。たとえば、45年、専売公社仙台地方局直轄（宮城県、中北部）においては、上層農家の兼業もかなりふえている。それは、全たばこ作農家のうち、専業によるものは25%になった。また新農家の分類によれば、ほとんどは、第1種農家によって担われていることがわかる（表8）。

兼業の業種については、地域や経済地帯で若干ことなるが農家の一般的なものと変わりはない。たとえば、宮城県黒川郡大郷町（本県でのたばこ作先進地）におけるたばこ作農家の兼業は、\*圧倒的に土木建設業関係の人夫・日雇であり、続柄、階層を問わずにひろまっている。

## （2） 経営組織

たばこ作農家を経営組織別にみよう。すなわち、たばこ単一経営が、全たばこ作農家の34%、稲単一経営36%、複合経営は27%となっている。岩手の第4在来種の場合は、たばこ単一経営が圧倒的である。これは、第4在来種を栽培する農家が、その他の品種を栽培する農家にくら

表9 経営組織別たばこ作農家

（第1種農家）単位：戸、%

品 種 別	項 目	単 一 経 営									復 合 営	合 計
		た ば こ	稲	麦	雑穀豆 いも類	野菜高 等園芸	果 樹	その他 の作物	養 畜	養 蚕	計	
実 数	仙台地方局	8,150	8,443	19	170	32	198	116	362	30	17,520	8,289
	パーレー種	8,481	6,268	28	61	40	105	35	158	26	15,202	49,122
	第2在来種	353	19	—	1	—	—	—	—	—	373	28
	第4在来種	1,398	4,897	6	1	5	5	11	152	11	6,486	18,566
	第5在来種	18,382	19,627	53	233	77	308	162	672	67	39,581	150,855
	計	161,674	61,186	259	544	931	1,433	936	1,960	792	229,715	93,122
比 率	全 国	31.6	32.7	0.1	0.7	0.1	0.8	0.4	1.4	0.1	67.9	32.1
	仙台地方局	42.2	31.2	0.1	0.3	0.2	0.5	0.2	0.8	0.1	75.6	24.4
	パーレー種	88.0	4.7	—	0.3	—	—	—	—	—	93.0	7.0
	第2在来種	16.8	58.7	0.1	—	0.1	0.1	0.1	1.8	0.1	77.8	22.2
	第4在来種	(34.0)	33.6	0.1	0.4	0.1	0.6	0.3	1.2	0.1	72.4	27.6
	第5在来種	50.1	19.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.3	0.6	0.2	71.2	28.8

（注）1. 前表に同じ。

2. （ ）内は、昭和43年現在、専売公社仙台地方局資料による。

べると、相対的に経営規模が小さく、兼業もまたすすんでいるためである。第5在来種（ほとんどが宮城）は、約59%が稲作単一経営で、複合経営は22%である。さらに、東北で支配的な作付を占めるパーレー種、第2在来種では、たばこ単一経営が、それぞれ32.42%、その他は複合経営となっている。たばこ作単一経営の占める割合は、43年現在に

\* 詳しくは、拙稿「たばこ作経営の現状と問題点」東北大学農学部農業経営学研究室（「農業経済研究報告」昭和43年2月）所収を参照されたい。

おいても変っていない(表9)。

### (3) 生産の担当層

たばこ作農家の経営耕地面積と、たばこ作面積の相関を品種別に調査(1965年、たばこ作農家センサス)している。この調査は、全国の抽出調査であるが、パーレー種の産地は東北であるから、これはその儘東北の実態を現わしている。また、第2、第4、第5在来種については、かなり東北に作付されているから、その傾向を知るには充分である。これによって、ある経営耕地面積規模階層で、一定のたばこ作面積規模階層のものが、どれだけ占めているかを組合せでみよう。すなわち、第2在来種では、経営耕地面積階層(以下、耕地とよぶ)0.5~1.0ha、たばこ面積階層(以下たばことよぶ)10~15aが最も多い。組合せが集中しているのは、耕地0.5~1.5ha、たばこ10~25aである。耕地2.5ha層までは、耕地が大なるほどたばこも多くなる傾向がある。しかし、耕地2.5ha以上になると、たばこは逆に減少し、せいぜい35aが限界となっている。その耕作戸数も極めて少ない。耕地0.5ha未満では、たばこ10~15aの組合せが最も多く、たばこ30aが一応の拡大される限界をしめしている。これはまた、戸数は少ない。パーレー種では、耕地1.0~1.5ha、たばこ10~15aの組合せが最も多い。組合せの集中するところは、耕地0.5~2.0ha、たばこ10~25aである。耕地0.5~3.0ha層までは、第2在来種と同様、上層になるほどたばこ作も多くなる傾向をもっている。しかし、その戸数は次第に減少している。耕地3.0ha以上層、および0.5ha未満層は、たばこ15~20aが一応の拡大限界であって、戸数も極めて少ない。パーレー種は、第2在来種にくらべて、全体として耕地規模の高い層に導入されている。また、第4、5在来種は、第2在来種とほぼ同様の傾向をもって導入されている。このようにみると、たばこ作経営は、品種によって、若干の相違はあ

表10 経営耕地面積とたばこ面積の相関

経営耕地 たばこ面積	第 2 在 来 種									第 4、5 在 来 種									パ ー レ ー 種									
	ha ~0.5	0.5~ 1	1~ 1.5	1.5~ 2.0	2.0~ 2.5	2.5~ 3.0	3.0~ 5.0	計	平 均	ha ~0.5	0.5~ 1	1~ 1.5	1.5~ 2.0	2.0~ 2.5	2.5~ 3.0	3.0~ 5.0	計	平 均	ha ~0.5	0.5~ 1	1~ 1.5	1.5~ 2.0	2.0~ 2.5	2.5~ 3.0	3.0~ 5.0	計	平 均	
10 a 未 満	9	41	19	6	3	1		79	89.9	11	61	34	12	2	1		121	98.5	4	14	9	6	4	1	4	38	124.8	
10 ~ 15	25	84	57	23	7	1		197	99.6	14	75	58	26	6	3	2	184	107.6	6	47	56	40	17	2	8	172	136.9	
15 ~ 20	10	71	60	20	9	5	2	177	120.4	6	32	47	18	8	3	2	116	134.4	2	23	36	27	16	4	112	116	162.3	
20 ~ 25	4	52	36	18	7	1	4	122	127.0	5	19	19	14	3	2		62	125.4	1	16	22	21	20	11		93	169.7	
25 ~ 30	2	31	26	10	6		2	77	122.1	8	10	3	3			1	25	154.8		3	7	15	8	2	1	35	167.5	
30 ~ 35	1	19	29	10	2	3		64	124.4	5	6	5	1				17	122.6		3	5	7	5	1		22	170.3	
35 ~ 40		9	21	10	3			43	134.3			2	1				3	142.0		1	2	3	4	1		11	182.6	
40 ~ 45		5	11	6	1		1	24	136.2		1	2	1	1			5	146.2			1	1	1	1		4	188.5	
45 ~ 50		6	11	6	2			25	141.6			1	1				2	159.0					1	1		2	270.0	
50 ~ 60		2	9	12	2	1		26	164.5			2					2	136.0					1	1		2	193.5	
60 ~ 70			3	5	1			9	170.0			1					1	125.0							1	4	198.8	
70 ~ 80								1	157.0																1	1	260.0	
80 ~ 90																												
90 ~ 100																												
100 ~ 150																												
合 計	51	320	282	128	43	12	9	845	190.0	36	201	182	81	24	9	5	538		13	107	138	124	77	26	15	500		
平 均	13.7	23.3	26.3	29.4	25.5	23.8	25.1			10.9	12.8	15.8	17.9	18.6	15.6	17.6			11.4	15.3	16.4	19.5	19.8	27.4	17.2			

(注) 専売公社「1965年、たばこ作農家センサス」によって作成。

るが、耕地1haを中心にして、支配的に導入されている。中層農を主体とし1部上、下層の有力な畑作商品作物となっている。

## 2 たばこ作農家の分化

### (1) たばこ耕作規模

たばこ作の発展過程をたどると、発展期においては、耕作戸数増加率<耕作面積増加率であり、衰退期においては、耕作戸数減少率>耕作面積減少率となっている。このことは、たばこ作面積10a以下の零細な農家が消滅し、その規模はわずかながらも、年々拡大化の傾向にあることをしめしている。たとえば、仙台地方局直轄下の、仙台たばこ耕作組合の場合、35年に対する42年の耕作戸数増加率は13%、面積増加率15%となっている。たばこ作農家の規模が、次第に拡大されていることがわかる。たばこ作の規模拡大を、階層別にみると、35年においては、たばこ作農家の圧倒的な規模は25a以下によって構成されていた。これは一つに、たばこが、労働集約的であるため、耕作する規模が投下労働の面から、一定の制約が加わっていたためとおもわれる。その後、栽培技術の改善や葉のし選別労働などの軽減によって、投下労働量はかなり減

表11 たばこ作階層別農家

(仙台地方局管内)単位:戸,%

品 種 別		たばこ面積規模										
		10 a 以下	10 ～15	15 ～20	20 ～25	25 ～30	30 ～35	35 ～40	40 ～50	50 ～60	計	
実	40	第2在来種	9,612	6,833	2,645	751	174	99				20,114
		第5在来種	3,107	2,667	1,520	677	241	130				8,342
		パーレー種	6,442	7,291	5,743	3,429	1,558	1,336				25,799
		そ の 他	269	110	19	2	1	—				401
		計	19,430	16,901	9,927	4,859	1,974	1,565				54,656
数	43	第2在来種	1525	4,412	3,400	2,791	1,575	1,204	629	736	301	16,573
		第5在来種	606	2,184	1,636	1,153	510	293	124	121	45	6,672
		パーレー種	1,138	6,324	4,446	3,349	1,434	1,127	428	464	169	18,879
		そ の 他	28	54	56	85	52	64	33	26	10	408
		計	3,269	12,974	9,538	7,378	3,571	2,688	1,214	1,347	525	42,532
比	40	第2在来種	47.8	34.0	13.2	3.7	0.9	0.5				100
		第5在来種	37.2	32.0	18.2	8.1	2.9	1.6				100
		パーレー種	25.0	28.3	22.3	13.3	6.0	5.2				100
		そ の 他	67.1	27.4	4.7	0.5	0.2	—				100
		計	35.5	30.9	18.2	8.9	3.6	2.9				100
率	43	第2在来種	9.2	26.6	20.5	16.8	9.5	7.3	3.8	4.4	1.8	100
		第5在来種	9.0	32.7	24.5	17.3	7.6	4.4	1.9	1.8	0.7	100
		パーレー種	6.0	33.4	23.5	17.7	7.6	6.0	2.3	2.5	0.9	100
		そ の 他	6.9	13.2	13.7	20.8	12.7	15.7	8.1	6.4	2.5	100
		計	7.7	30.5	22.4	17.3	8.4	6.3	2.9	3.2	1.2	100

(注) 昭和43年専売公社仙台地方局(「これからのたばこ作経営」44年8月)同40年は、「1965年たばこセンサス農家調査結果」の第1種農家のみにて作成。

少した。また、価格の相対的な有利性などもあって、35年に対する42年の耕作者は、約2.3倍となり、たばこ作規模別構成に大きな変化をもちた。10a以下層が減少し、10a以上層がのび、全体として30a層を中心に増大している。

さらに、東北の場合を40年と43年の対比でみても、15a以下では66~38%に減少し、15a以上層はいずれの階層も増大している。こうしたなかで、30a以上層は3~14%に増大したのである。たばこ作農家の絶対数が減少しているなかで、たばこ作農家の分化がすすんでいる(表11)。

## (2) 専門的経営への可能性

たばこ作の規模拡大が、とくに40年以降顕著になっている。たとえば、山形支局管内における、41年たばこ耕作大経営調査をみると、この時点で35~40aが33戸、40a以上のものが35戸となっている。これは、同管内たばこ作農家の約5%に当たっている。最高は約80a規模で、約63万円の粗収入を得ている。また、宮城県南部畑作地帯の1農家は、水田1.4ha、たばこ105aの稲作複合型の経営をとるたばこ作大経営農家である。圃地の条件や設備が整っているばかりでなく、44年度は新品種、白遠州を試作し驚異的な成績をあげている。10a当りの収量では、標準量を98kgも上回る358kg、総収納代金200万円をあげている。家族労働力は4人(実質3人)雇用労働は、植付や収穫時に50人程度雇っている。<sup>\*</sup> なお、同地域で最大のたばこ作規模は1.8haである。<sup>\*\*\*</sup> さらに、青森県東北町のK農家は、43年現在、すでに1.3haのたばこ作経営をおこなっている。<sup>\*\*\*</sup>

つぎに、昭和43年度実施の、仙台地方局パイロット農場(個人4、法人1の5農場が指定になっているが、資料の都合で法人を除く)についてみよう。いずれの農場も、たばこ作の規模は0.8~1.2haであって、たばこ作専門型、あるいは稲作、酪農との複合型経営である。家族労働力は3~4人で(山形を除き)、植付、収穫に若干の雇用を入れている。家族労働力1人当りのたばこ負担面積は、ほぼ23~30aとなっている。いずれの農場も、革新的な技術を採用し、慣行技術の投下労働量を25~30%下回っていて、かなりの成果をあげている。今後における改善策のいかんで、さらに規模拡大が可能になろう。大曲出張所管内の農場の場合は、1.2haのたばこ作規模で、期差植付をおこない、省力効果はもちろん、平均以上の耕作成績をあげている。この農場でおこなっている期差植付は、苗床のときから、あらかじめ40a程度分位つつの苗を早期分、中期分、晚期植付分とに三分割し、中、晚期植付分をビニョット育苗をしておくのである。これは、経営規

\* 「河北新報」昭和45年1月26日。

\*\* 「毎日新聞」昭和45年2月10日。

\*\*\* 「河北新報」昭和44年3月3日。

表 12 パイロット農場

出張所		白石（宮城）	山形（山形）	大曲（秋田）	八戸（青森）
項 目	種 営	第5在来種(白たるま)	第2在来種(松川葉)	バーレー種	バーニー種
家族労働力	個人	3人	3.5人	4人	3人
雇 用	植付収穫のみ		0	収穫のみ	植付収穫のみ
耕 地	水 田	0.55 ha	0.80 ha	0.12 ha	0.20 ha
	普 通 畑	18.2	1.01	1.61	2.56
	うちたばこ	0.82	0.81	1.21	0.76
	そ の 他	(梅林) 0.20	(桑園) 0.20	0	0
家 畜	山林牧野	0.70	1.00	2.70	1.00
	役牛馬	(馬) 1頭	0頭	0頭	0頭
	乳牛	0	2	0	4
たばこ 10a当 たり	投下労働	436時	465時	397時	432時
	収納代金	143,461円	90,255円	132,594円	102,015円
たばこ	総 収 入	円	864,204円	1,621,886円	1,053,340円
	総 支 出		287,190		433,588
	差 引		577,014		619,752
1日当り家族労働報酬		円	1,241円	円	1,520円
農 業 総 収 入		2,036,390		2,127,726	2,109,164
たばこ作経営の特徴		ポリテープによる倒伏防止と幹干乾燥	幹干乾燥 風火力利用	ビニールハウス内幹干乾燥	幹干乾燥 (16枚着葉)
今 後 の 主 な 改 善 策	品 種 の 更 新	○			
	電 熱 育 苗	○			
	電熱共同育苗改良		○		○
	畦面による子床省略				
	改良畦面被覆栽培	○	○	○	
	改良畦面被覆栽培				○
	小型移植機試用				○
	中耕・土寄簡省略			○	○
	植付機械力利用	○		○	○
	幹干乾燥拡大	○		○	
	乾燥設備の拡充	○	○		○
	ベルコン共同使用	○	○		○
結 束 の 簡 易 化			○		○
規 模 拡 大				(1.8~2.0)ha	○

注) 専売公社仙台地方局「昭和43年、パイロット農場成績書」によって作成。

模と家族労働力の面からみて、極めて合理的なやり方である。植付は、慣行の場合5月10日頃であるが、期差植付をする場合、早期分は4月20日頃の植付になっている。期差植付や幹干乾燥法（後章で詳しくのべられる）を取り入れることによって、東北においても、たばこ作の専業的大規模経営が可能となっていることを立証している（表12）。



しかし、個別経営における一般的なたばこ作は、従来のように複合生産のなかで規模拡大をすすめることになる。その際、一般的には土地、労働力の面から——もちろん公社の生産政策や価格の問題もあるが——30a前後の規模が一応拡大しうる限界になるようにおもわれる。\*

このように、個別経営におけるたばこ作規模が拡大している一方、生産のモデル団地計画推進や協業による大規模経営も試みられるようになった。岩手県においては、45年度から3ヶ年計画で、1ヶ所10ha単位のたばこモデル生産団地を、県内15ヶ所に造成する計画で、たばこの主産地形成事業にのりだすことになった。\*\*\*

また、青森県六戸町の農家8戸が、農事組合法人、岡沼たばこ農協を設立し、10haのたばこ作協業に、45年度からのりだすことになった。これは、公社が45年度から、近代的葉たばこ生産実験農場を設けることになったからである。全国で、10ha程度の協業農場を5ヶ所指定し、葉たばこ経営のモデルにしようとするもので、仙台地方局管内第1号である。機械施設4千万円程度が貸与される。この農場は、当面1戸当たり100万円の農業所得を目標にしている。将来は、経営規模を拡大し、各戸200万円以上の農業所得を確保し、たばこだけで自立できる経営をつくりあげようとしている。\*\*\*

## Ⅳ たばこ作技術の発展

ほぼ40年以降、たばこ作規模の拡大が急速にすすみ、大経営をも成立させるにいたった条件は、何であつたろうか。公社は、生産性の高いたばこ作をもとめているため、零細なたばこ作ではうま味がなくなってきたこと。また、たばこ作に革新的な技術が導入されるにいたったからである。ここでは、たばこ作の技術的諸変化をみていこう。たばこ作農家は、従来公社の耕作指導を遵守することを義務づけられていた。したがって、公社の指導する耕作技術は、ほとんど抵抗もなく、農民に受入れられていた。しかし、当時の耕作指導からして、農民を主体とする革新的な技術がうまれる環境は、ほとんどなかったようにおもわれる。ところが、36年をさかいにして、公社は、かねがね耕作農民が希望してやまなかった省力耕作を、追求せざるを得ない破目にいたった。それは、すでに述べたように、製造たばこの消費需要の増大、一方では、農家労働力の他産業への流出などによって、たばこ作が著しく衰退したためである。このような危機に際して、公

\* 仙台地方局（「これからのたばこ作経営」昭和44年8月）によれば、規模拡大によって収納代金は直線的に増加し、投下労働時間は逆に、規模が拡大するほど直線的に減少することを指摘している。このことから、稲作複合型の経営においては労働所得、労働生産性の点から、30a規模が適当であるとしている。また、専業可能な地帯では、80a規模で採算のとれることを指摘している。

\*\* 「読売新聞」昭和45年2月1日。

\*\*\* 「河北新報」昭和45年4月13日。

社がとった増反策の大きな柱は、価格対策と省力耕作の推進であった。たとえば、仙台地区たばこ耕作組合管内では、県、農業団体総ぐるみの協議会を設置し、たばこ作の増反に努めたのである。このようにして省力耕作がすすむのである。すなわち、本圃においては、動畜力の利用がすすんだ。調理労働も簡易化し（葉のしをなくした）かなりの軽減をみた。その後には、早期栽培や移植の能率化のために、苗床の電熱利用、ビニポットなどが採用されるようになった。苗床の共同化もすすんだ。42年作をみると、早期栽培は全管内に普及するにいたった。このように、育苗技術がすすみ、ところによっては、多段式電熱育苗へと発展している。育苗技術と関連する問題であるが、早期栽培の一環として、本圃においては、畦面被覆栽培（マルチング）がすすめられるようになった。これは、41年の冷害を契機として一層普及する段階を迎えている。公社は、43年を導入の年とし、3ヶ年計画で全面実施を、おしすすめようとしている。また、農業機械の発展にともなう耕耘機導入にうらうちされ、整地、中耕・培土、施肥作業への機械力利用がすすんだ。さらに、動力噴霧機の利用によって、共同防除なども積極的におこなわれるようになった。収穫乾燥では、収穫葉の動力運搬はもちろん、乾燥室の整備もすすみ、品質の改善、作業の能率化に積極的な役割を果たすにいたった。仙台地方局「昭和41年度事業概要」によって、乾燥室の建設補助金交付実績をみると、普通建乾燥室、簡易乾燥室（それぞれ相半ばしている）を合すると、約4.3千人の耕作者が、補助対象となった。これは、全耕作者の65%に相当している。その棟数は約4.3千棟、面積で約191千 $\text{m}^2$ 、平均1棟当たりの交付金額は、約4.2万円となっている。このように、乾燥室の整備とあいまって、風火力乾燥技術、幹干乾燥技術も、ようやくとり入れられるようになった。仙台地方局においては、42年から幹干乾燥法を奨励することになった。幹干乾燥法は、土葉～土・中葉4～5枚をかきとって連干とし、それ以上を幹刈して乾燥するのが普通である。本葉以上を幹刈乾燥した場合、量目で5%前後減収するが、本葉、天葉は軽質で品質がよいといわれている。幹刈部分の着葉を何枚にするかは、品種や収量などによって、適宜加減すればよいのである。労力は、慣行の乾燥法にくらべて、50～60%の節減がなされるようである。従来、仙台地方局管内に栽培されている品種のほとんどは、連干乾燥法である。これは、葉を1枚1枚かきとって連にはさみ、粹干、屋内干、あるいは地干をするのである。したがって、手間がかかり、たばこ作総投下労働量の、35～40%を占めていた。たばこ作の規模拡大や専業的大規模経営をすすめる上での障害になっていた。したがって、幹干乾燥技術の採用は、期差植付などと共に、大規模経営への展望を開く、大きな意味をもっているのである。しかし、幹干乾燥法は多くの場合、多肥多収栽培をとっている農家には、減収の懸念や技術の未熟、乾燥設備を拡大しなければならないこともあって、一般化する段階にいたっていない\*。調理作業は、省力耕作がおこなわれる以前は、一般的にたばこ作投下労働量の30%前後を占めていた。しかし簡易調理、あるいはベルトコンベアを採用する農家もあって、調理作業は一層省力化の方向にきている。こ

\* 葉たばこ乾燥法については、専売公社仙台地方局生産部（「葉たばこ乾燥の理論と実際」昭和42年6月）、同地方局（「東北たばこ産地の安定と発展をめざして」昭和43年3月）に詳しいので参照されたい。

表 13 たばこ作の段階別標準技術体系

(第2在来種)

作業項目	苗 床	耕 鋤 地	植 付 植	追肥・中 耕・土寄	防 除	摘 心 摘 芽	収 穫	乾 燥	調 理・堆 積・発酵	残 弊 処 理	くみ作 業人員	播 種 期	植 付 期	収 穫 期
省力栽培以前 昭和21～26年頃迄 (平均規模5～15a)	発熱材詰 込・平床 手押切	施肥・畦作り 手鋸	苗運搬手鋸	リヤカー 手鋸	2～3回	2～3回	手摘み	1枚づつ順 にかきとる	選 干 リヤカー 室内干	選別、1枚 づつ葉のし 調 理	抜 幹 リヤカー 手鋸	人 2～3 3月23日 ～ 3月31日頃	5月13日 ～ 5月25日頃	8月1日 ～ 9月10日頃
省力栽培以後 昭和37～41年頃迄 (15～20a)	同上 (ビニョット) 同上 (カッター)	同上 耕 鋤 機 (トラクター)	同上 (マルチング) 耕 鋤 機 (トラクター)	同上 (リヤカー) 同上 (トラクター)	同上 (共同)	MH- 30 撒布 (動噴)	同上 同上 (幹刈り)	同上 (風火力) 同上 (乾燥)	葉のし焼止 選 別 簡易調理	同上 (トラクター)	同上 (4～8)	3月15日 ～ 3月25日頃	5月5日 ～ 5月20日頃	7月15日 ～ 8月31日頃
省力栽培以後 昭和42～45年頃迄 (20～25a)	同上 (電熱共同) カッター	同上 同上	同上 (改良マルチ) 同上 (接履機)	1～2回 (追肥せず) 同上	同上共同 動 噴	同上 動 噴	同上 (乾燥)	同上 (乾燥)	同上 簡易調理 (ベルコン)	同上	同上 (4～8)	3月10日 ～ 3月25日頃	5月1日～ 5月20日頃 (改良マルチは 4月15日～ 4月20日頃)	7月10日 ～ 8月31日頃

(注) 1. 専売公社仙台地方局(「たばこ耕作指導事項」昭和44年度)および聴取り調査などを参考に作成した。  
 2. 技術段階区分の上段は作業内容、下段は作業に用いる機具、用具の概略をしめした。  
 3. 同上とはそれぞれ前段に対するもの。  
 4. 作業項目の( )内は、一般化せず1部におこなわれているものをしめした。

のように、栽培、作業技術\*が変化発展し、たばこ作経営は除々に、一面では急速に新しい段階を迎えていることがわかる(表13)。

省力技術の進展が、品種、作業別にどれだけの労働を軽減したかは、個別の経営によってまちまちである。したがって、ここではいくつかの事例をあげ、10a当たりの投下労働について検討しよう。表14の農家(A)は、公社の省力耕作指導がなされる以前の10a当たりの投下労働量をしめす。すなわち在来種の10a当たり総投下労働量は、904時間である。この内容をみると、苗床一切で78時間、本圃202時間、収穫、乾燥358時間となっている。これを、省力耕作指導以降の、投下労働量をしめす農家(B)と比較しよう。農家(B)の10a当り投下労働量は、633時間であるから、農家(A)より271時間減少したことになる。この差は、主に収穫、乾燥、調理労働の軽減によるものである。農家(B)は、その地区での優良農家であるから、この点を割引いてみても(慣行の投下労働量にのみかえるならば)公社が、省力化の方針をうちだす以前からみて、200時間前後は減少していると見做すことができる。また、農家(A)のバーレー種は、在来種より投下労働量がやや少ない。これを、(E)調査①、仙台地方局現行の投下労働量と比較すると282時間減ったことになる。これは、在来種と同様、調理をはじめ、収穫、乾燥労働の軽減に負うところが大きい。さらに、農家(A)調査バーレー種に対して、(C)パイロット農場を比較すると、429時間の減少である。この減少は、調理、本圃、収穫、乾燥労働の軽減に負うところが大きい。とくに、本圃労働の軽減が注目される。このパイロット農場は、一般的な個別のたばこ作経営に対し、集団経営の有越性をしめす1例である。仙台地方局が目標としている、バーレー種10a当りの投下労働量544時間を、このパイロット農場では、すでに達成し

\*第2在来種の標準技術体系については、山形県立農業試験場(「山形県における作目別作業別技術係数に関する研究」昭和42年3月)所収「たばこ」に詳しい。

表 14 たばこ作投下労働量

(10a当り)単位:時, %

調査農家・農場		(A)		(B)	(C)	(D)			(E)		
対象作物面積				28 a	21 ha						
品 種 名		在 来 種	パーレー種	在 来 種	パーレー種	在 来 種			パーレー種		
調 査 年		32		37	39	43 ① 現 行	② 目 標	② ① × 100	43 ① 現 行	② 目 標	② ① × 100
苗 床		(8.7) 78.3	(8.9) 78.4	(14.5) 92.0	(12.6) 56.0	(8.6) 58.0	(8.7) 57.0	98	(8.6) 51.0	(9.0) 49.0	96
本 園	整 地・基 肥	38.4	32.1	34.4	6.4	25.0	23.0	92	23.0	22.0	90
	移 植・補 植	30.0	39.6	43.2	12.0	28.0	28.0	100	29.0	29.0	100
	追肥・土寄・除草	73.9	60.3	28.8	16.8	37.0	35.0	95	33.0	30.0	91
	摘 心・摘 芽	50.5	26.4	36.8	4.8	25.0	24.0	96	17.0	17.0	100
	防 除・管 理	9.3	9.5	8.8	3.2	14.0	15.0	108	12.0	16.0	140
	小 計	(22.4) 202.1	(19.2) 167.9	(24.0) 152.0	(9.7) 43.2	(19.0) 129.0	(19.0) 125.0	97	(19.4) 115.0	(21.0) 114.0	96
収 乾 ・ 小	収 穫	122.1	120.7	222.8	212.8	100.0	99.0	99	100.0	95.0	95
	乾 燥	235.5	199.7	222.8	212.8	172.0	165.0	96	141.0	132.0	94
	小 計	(396) 357.6	(36.7) 320.4	(36.2) 222.8	(47.8) 212.8	(40.2) 272.0	(40.1) 264.0	97	(40.7) 241.0	(41.7) 227.0	94
調 理	調 理	245.3	289.0	143.2	100.8	204.0	199.0	98	172.0	142.0	83
	堆 積 発 酵	20.4	18.3	16.8	32.0	14.0	13.0	93	13.0	12.0	92
	小 計	(29.4) 265.7	(35.2) 307.3	(25.3) 160.0	(29.7) 132.8	(32.2) 218.0	(32.2) 212.0	97	(31.2) 185.0	(28.3) 154.0	83
合 計		(100) 903.7	(100) 874.0	(100) 632.8	(100) 444.8	(100) 677.0	(100) 658.0	97	(100) 592.0	(100) 544.0	92

(注)1. 農家(A)は、山形地区たばこ耕作振興協議会資料。農家(B)は、宮城県石巻市(旧稲井町)聴取り調査、農場(C)は、専売公社仙台地方局大迫パイロット農場の調査結果。(D)、(E)は、専売公社仙台地方局「たばこ耕作指導事項」昭和44年)によって作成した。

2. ( )内は比率をしめす。

ている。しかし、多くの個別経営が、この目標に達するには、苗床や調理労働の軽減に努めることはもちろん、とくに本園労働の軽減が重要となる。

## V たばこ作発展への方策

東北のたばこ作は、規模拡大化の方向をたどるなかで、41年を頂点として、零細なたばこ作規模農家は急激に減少している。つまり、たばこ作は上向層の発展を別とすれば一般的に停衰退化をたどっているところが少なくないのである。こうした地域、経済地帯において、たばこを有利な作目として定着させ、発展させるための方策は何であろうか。

ここでは、当研究室が中心となっておこなった二、三の農山村実態調査のなかでのたばこ作をふまえて、その方策をさぐってみよう。公社の生産方針としては、コストが低く、生産性の高い品質良好なたばこ生産を目標にしている。したがって、これに対応する生産態勢をとらざるを得ない。そのためにも、たばこ作規模の拡大が前提となる。個別農家が稲作と結合する場合でいえば、

少なくとも30aのたばこ作規模が一応の目標になろう。同時に、可能な限り団地化をすすめることが必要である。たばこ団地は、理想的には集落単位が望ましい。集落単位にたばこ団地がすすめられたいい実例としては、宮城県黒川郡大郷町\*（農山村）がある。すなわち、本町のたばこ団地は、41年度より実施された農業構造改善事業の一環をなすものである。畑の整備（2ヶ所、受益農家47戸、その面積約12ha）によったものである。これとあいまって、育苗兼乾燥室（多段式）中核乾燥室、葉編機を導入して協業化をはかり、たばこ作経営の機械化一貫作業を目的にすすめている。

しかし、このようなところは稀であって、たばこ団地化は一般的には困難なところが多い。そこで、3戸1ha、5戸2.0ha、10戸3.0ha集団のように、それぞれの地帯、経営に合致するかたちですすめなければならない。たとえば、山村岩手県下閉伊郡川井村,\*\* 秋田県仙北郡西木村\*\*\*のように、耕地が零細分散的で、機械力利用の困難なところでは、勢い小規模（1.0～3.0ha程度）集団にならざるを得ない。既成畑からでは、これもなかなか容易なことではない。両村のようなところでは、山林原野が多いから、たばこ圃地に適した山林原野の利用によって、団地開畑を考慮するのも1方策である。たばこ作の団地化と関連して、協業化を推進することも重要である。このようにたばこ作の団地化、協業化は、それぞれの地域、経済地帯において難易はあるが、いずれの地帯にも共通する重要な点である。

また、商品作目の混在する地帯においては、たばこ作と他作目との土地利用競合、作業競合を避けるため、作目の選択を工夫することが重要である。商品作目の混在する地帯といえば、山形県西村山郡西川町\*\*\*\*を1例としてあげることができる。ここは、水稻、たばこ、ホップ、コンニャク、養蚕、畜産、果樹などの（いずれも規模は小さい）商品作目が混在しているが、たばこ作と他作目が競合することは少ない。たとえば、1集落20戸のたばこ耕作者（たばこ作の相対的に盛んな集落）についてみると、稲作とたばこの複合型経営をとっていて、たばことホップ（以下、それぞれたばことの複合型）コンニャク、養蚕、畜産、果樹などと複合する農家は1戸もみられない。

他作目と作業競合を避けるためには、育苗法の改善によって、畦面被覆栽培法や期差植付なども重要である。さらに、労働力の軽減と品質の向上をはかるため、乾燥設備の充実と乾燥方法の改善に努めることなども、たばこ作発展に欠くことのできないものとなっている。これらの発展

\* 前出し、拙稿「たばこ作経営の現状と問題点」。

\*\* 詳しくは山村振興調査会（「北上中央山村のすがたと進路」昭和42年度）岩手班、東北大学農学部農業経営学研究室、林業試験場東北支場経営第2研究室を参照されたい。

\*\*\* 詳しくは、山村振興調査会（「近刊」昭和44年度）秋田班、東北大学農学部農業経営学研究室、林業経営研究所 森 巖夫を参照されたい。

\*\*\*\* 詳しくは、山村振興調査会（「出羽山系山村のすがたと進路」昭和41年度）山形班、東北大学農学部農業経営学研究室、日本医学会 西成辰男を参照されたい。

策をおしすすめるに当っては、当該市町村の積極的な指導援助が必要である。しかしながら、たばこ作は公社と農民との契約栽培であるから、その生産政策によって、強く規制され面が多い。公社は、耕作農民の意向を充分反映させて、長期的な生産計画を樹立すべきである。

## VI む す び

以下は、要約的なむすびとしたい。東北におけるたばこ作経営は、それぞれの地域、経営形態のなかに広汎に導入されてきている。戦後におけるたばこ作の展開をみると、ほぼ第1期～第5期に画することができる。この過程において、41年を頂点とし田畑作地帯、畑を加味する田作地帯に顕著な発展をみた。43年現在におけるたばこ面積（仙台地方局管内）は8.5千haで、田畑作地帯のたばこ作は、東北のたばこ作の約40%となった。しかし多くの耕作者は20a前後の零細な規模にとどまっているのが一つの問題である。

また、経済地帯別にたばこ作の分布をみると、耕作戸数、面積ともに農山村が60%を占めて圧倒的である。35年以降43年についてみると、都市近接地より遠隔地（平地農村→農山村→山村）つまり外延的に拡大しているところと、遠隔地より都市近接地に一貫して拡大している二つのタイプがみられる。いずれにしても、35～41年は、たばこ作の急速な発展期でもあって、多くの新興産地が生まれ消滅するなど、産地形成が流動的であった一面をみることができる。

このような分布をしめすたばこ作の収益性は、どうなっているのであろうか。まず、経済地帯間のたばこ作農家の栽培規模をみると、ほとんど違いはない。生産力（反収）では、一般的に都市近接地より遠隔地になるほど高い。これは、一つには、多肥多収型の栽培が遠隔地においてよりすすめられているためと思われる。したがって、品質では全く逆で、遠隔地になるほど悪い。その結果、経済地帯間におけるたばこ作農家の粗収入に差異は認められないのである。10a当りの純収益では、平地農村は5千円前後、農山村、山村はマイナスとなっている。純収益は、家族労働報酬に直接反映して、平地農村におけるたばこ作は有利で、農山村、山村は相対的に不利になっている。

また、経済地帯別に作目間の優劣をみると、純収益では、平地農村が米、養蚕について有利であるが、農山村、山村では他作目より劣るものが多い。労働報酬を指標にとれば、たばこ作を上回る作目は、いずれの経済地帯においてもない。また、1日当りの家族労働報酬をみると低い。つまり、たばこ作の労働効率は、いずれの経済地帯においてもかなり低いのである。かくて、たばこ作は労働集約に最も適した作目であって、圃地にめぐまれ、家族労働力の完全燃焼をはかる農家にとっては、有利な作目である。反面、他産業賃金との比較でもわかるように、たばこ作の

労働効率は低いから、この点からいえば、たばこ作は不利な作目といえる。兼業機会が、経済地帯間を問わず一層増大している今日、兼業はたばこ作にあたえる影響が少なくないのである。

さて、たばこ作農家の兼業はどうなっているのであろうか。40年現在においては、たばこ作農家の約半数は兼業農家によっていた。その後の兼業から推しても、少なくとも半数以上のたばこ耕作者は、兼業農家によっているものとおもわれる。

また、経営組織別にたばこ作農家をみると、たばこ作農家の70%は、たばこか稲作の単一経営で、30%は複合経営となっている。いわば、東北におけるたばこ作農家は、一般的には稲作を中心とした複合生産の型をとり、たばこが補合補完作目として選択されているのである。

つぎに、たばこ生産の担当層について一瞥しよう。第2在来種は、経営耕地面積階層0.5~1.5ha、たばこ面積階層10~25aに組合せ農家が集中している。パーレー種は、第2在来種にくべて、やや高い経営耕地面積階層に導入され、たばこ面積も相対的に大きいのである。たばこ作全体(第4,第5在来種を含み)としては、中農層に導入されるたばこ作が支配的となっている。

たばこ作の展開過程をみると、零細なたばこ作農家(主に10a以下)が消滅し、次第に規模拡大化(主に25a層中心に)がすすんでいる。廃作、そして一方には、規模拡大という、いわばたばこ作農家の階層分化が、顕著にみられるようになった。

従来、たばこ作は、とくに労働力規制の面から、基幹作目として選択されることが稀で、したがって専門化しにくいのが特徴的であった。しかし、40年以降において、革新的な技術がすすめられるようになって、個別経営、協業経営の如何を問わず規模拡大がすすんだ。そのなかで、何戸かの経営においてはたばこ作の専門的経営が可能であることを立証するにいたっている。いずれであっても、今後東北におけるたばこ作経営は、従来のように個別農家が、稲作と結合したかたちをとって、規模拡大するものが支配的になろう。一方、協業化によって規模拡大をはかるたばこ作経営が一層出現するに相違ない。たばこ作は、新たな画期を迎えているのである。

さて、たばこ作の規模拡大をすすめるうえで、その背景をなしたものはなにか。もはや、零細なたばこ作ではうま味がなくなってきたためである。一方において、規模拡大を容易にするたばこ作技術の発展をみることができる。たばこは、労働集約的であるため、従来の技術水準の下では、規模拡大は困難であった。しかも、農民主体の革新的な技術が生かされる環境はほとんどなかった。しかし36年を境にして、たばこ作が衰退化するにおよび、公社は省力耕作に転換せざるを得なかった。省力耕作指導によって、育苗技術の改善、本圃への機械力利用、共同防除、乾燥室の整備もすんだ。その後には、一部の耕作者ではあるが、電熱共同育苗、本圃では畦面被覆栽培がおこなわれるにいたった。乾燥調理の面では、幹干乾燥法の採用、あるいはベルコン調理などかなり革新的な技術が採用される段階を迎えたのである。この過程において、パイロット農場の実験もすすめられ、たばこ作経営に多くの先鞭をつけたのである。

こうして、たばこ作農家が規模拡大の方向をたどっているのである。しかし、一般的には、41年頃を境にして、たばこ作農家は減少し、停衰退化をたどるところも少なくない。これらの地域、経済地帯においては、たばこ団地の設定や協業化などによって、たばこ作の発展をはかることが重要になっている。

こうしたなかで、公社は44年産から6.7%の大巾減反を決定した。また、価格の面では、国際競争力のある良質葉の生産をはかるべく、上位等級価格の引上げ、下位等級価格の相対的引下げによって、等級間格差の拡大をすすめている。したがって、平均価格では引上げられても、たばこ作農家の懐は、かならずしも膨らまないのである。品質の悪い生産農家、いいかえるならば、山村地帯の農家ほど不利益を被ることになるのである。減反、価格の決定に際し、公社のあげている理由の第1は、葉たばこの過剰在庫である。第2は、製品たばこの売上げが鈍化し、販売趨勢の見透しが困難になっていること。第3は、輸出がのび悩みになっていることなどである。理由はどうあれ、外国産葉たばこ輸入増大のなかで、公社はコスト計算と需給状況の上になつて、従来の不合理な価格方式を、商業ベースに戻そうとするところにある。

こうして、零細なたばこ耕作者は、次第に淘汰され、生産性の高いたばこ作へと、再編成がすすめられているのである。葉たばこの輸入、減反、価格の等級間格差の拡大など、いずれも米作と共通するいくつかの問題がたばこ作に提起されているのである。たばこ耕作農民は、公社の長期的な生産計画を強く要望している。今をさかのぼる10年前、たばこ作の衰退期を迎え、公社は危機に瀕した経験を忘れることはできない。公社の生産政策に、耕作農民の意向をいかに反映させるかが、たばこ作発展の重要な鍵となるようにおもわれる。

以上の取纏めに当っては、専売公社仙台地方局生産部耕作課、滝沢和男氏をはじめ、技術課の方々に多くの御教示と資料の提供をいただいた。また、山形農試 五十鈴川寛氏、当研究室 菊元富雄、酒井惇一、浅井 陟 の各氏より多くの御教示と示唆をえた。深く感謝したい。